

---

# Special Force School (特殊部隊学校)

ACE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Special Force School (特殊部隊学校)

### 【Nコード】

N3768Z

### 【作者名】

ACE

### 【あらすじ】

世界中の地図の一部にしか載っていない日本の領海にある島で繰り広げられる学園と戦闘のオリジナル小説。

主人公の東出 将は2年なのに特殊部隊への推薦がくるほどの実力者だ。

そして将の幼馴染の志倉 茉都香とその他の個性的なキャラによる小説です。

## 第一射

「おはよー」

女子が後ろから飛びかかってきた。

「おっとと、危ないだろ！！」

「将なら大丈夫だつてww」

「お前なあ、まあいいか」

俺は東出 将（ひがしで しょう）

SFSの二年生だ成績はいい方で特殊部隊への入隊試験には合格した。だが特殊部隊にはいるつもりはない。

理由はすぐにわかることになるだろう。

後ろから飛びついてきたのは志倉 しくら 茉都香 まどか。俺の幼馴染だ。

そしてSFS唯一の女子である。

過去には何人かいたみたいだが現在一年から三年まで合わせても2人しかない。

そしてもう一人の女子は……最強だ。

SFSには一番強い人が生徒会長になるという伝統があるのだ。

そしてその生徒会長がもう一人の女子なのである。

特殊部隊学校は世界に情報が一切公開されておらず家族との面会も原則禁止。家族には緘口令までしかれるという。学校と言いつつもそれが怪しくなってしまうのだ。

まあみんな捨て子だったり孤児院の子だったりとはいらない場合の方が多いのだが……

茉都香も俺も親はいない。

捨てられていたところを自衛隊員に拾われ自衛隊の訓練を押さない頃から受けてきたのである。

だいたいが訳ありの子達なのである。

茉都香とは同じくらい新时期に別の自衛隊員が拾ってきた子で、かなりの時間一緒にいる。

俺は育ててくれた自衛隊員のみんなのために自衛隊に入るつもりだ。

朝から茉都香と話していると周囲から妬みの視線が向けられていた。中には銃を抜いているやつまでいた。

「森山とめるな！俺にあいつを撃たせろ！」

「高橋、学年かわって早々殺人は御免だぜ。」

先ほど俺を撃とうとしていた方は高橋 真司はとてもバカだ。すぐに銃を抜こうとする。

もう一人は森山 辰雄といいいつも高橋の暴走を抑えているしつかり者だ。普段は俺と茉都香、高橋、森山の四人で話していることが多い。

「チイツ」

高橋は舌打しながら愛銃のS & amp ; W MK22 Mod0をシヨルダーホルスターにしまった。

(いまさらだがさすがSFSって感じだな)

高橋の銃のS & amp ; W MK22 Mod0は別名ハツシユパピーといい世界の数多くの特殊部隊や軍隊で採用されているおもに暗殺に使われる銃だ。だが精密にできているため精度がよくSFSで使用している奴も多数いる。

ちなみに森山の銃は四六時中M - 200を持ち歩いている生粋のスナイパーだ。一応サブ装備としてM92Fのミリタリー<sup>ヘレット</sup>モデルを持っているが使っているところは見たことがない。

「ところでさあ今日の一限目のやつ自身ある？」

森山が気を使って話題を変えてくれた。

一限目のやつとは爆弾の解体実習のことである。SFSはあらゆるテロに対応するため爆弾解体や飛行機への突入実習などを行っている。

これらの実習は、基本二人一組になり小隊単位で行っている。

ちなみに六人組を中隊といいその中の二人組を分隊と読んでいる。

「十、九、八・・・」

「やべえ尾松がカウントダウンはじめやがったぞ!!」

尾松とは生活指導の先生でアメリカ人と日本人のハーフでアメリカ

海軍にアメリカ国籍を持っていないのに血が混ざっているという理由ではいつていてもしかも重要職についていた経歴を持っている鬼教官である。

「急げ急げ！新学年から遅刻はいたいぞ。」

こんな時でも高橋のテンションは高い。

「ゴメン将！！」

茉都香からのいきなりの謝罪に混乱していると踏み台にされて俺は倒れた。茉都香はジャンプのおかげで「五」で校門を抜けた。俺は0.5秒で起き上がり走り出……

ドタッ

「ゴメン志倉さんとの事わすれたわけじゃないんだ。」

せなかつた。高橋に足をかけられて盛大に転けた。転んだせいで間に合わなかつた。

肩に手が置かれた。

（茉都香かなあ・・・慰めてくれて……）

肩に手を置いていたのは尾松だった。

（……うう、吐き気が。）

「残念だが規則は規則だ。」

尾松がニッコリ笑顔で言ってきた。

その後俺は数枚の資料と原稿用紙十枚分の反省文を書かされた。

## 第一射（後書き）

どうも初投稿のACEです。

読んでくださった方本当にありがとうございます。

なお作者は学生で今受験を控えているため更新が不定期になったり  
前期選抜で落ちると更新が止まることがありますのでその点を踏ま  
えてください。

駄文ですがこれからもよろしく願います。

## 第二射

反省文を書き終えた俺は教室に向かって歩いていった。

新学年になりクラスが変わった事により教室がガヤガヤしている。

とおつてもニクラスしか無いので約半分は同じメンツなのだから・

（なんで遅れてすぐに反省文なんだ！？普通は後日提出とかじゃないのか？）

と考えていると自分の教室についた

「おはようございます。諸事情により遅れました。」

和やかにドアを開けたら先程の高橋が発砲して来たので二点バースト（改造により実現）に桜シグを切り替え初弾装填を高速で行い一発目を高橋の放った弾にあて逸らしつつ、二発目を高橋の脇腹に当てた。

「グハッ」

高橋が悶絶しているうちに席についた。制服にはケブラー繊維（防弾繊維の一種）が使われているため貫通をしていない。痛みは相当だがな。

そこで「朝はごめんね」と茉都香が手おあわせて言ってきたので

「気にするな、お前までなら間に合ったのに・・・悪いのは高橋の

奴だ。」

と返しておいた。

「オクレテスイマセン。」（遅れてすいません）

未だに日本語が片言なアインシュタイン三世が入ってきた。

この人はアインシュタインの孫で能力もアインシュタイン並だ。

俺の桜シグはフルオート・セミオート・二点バースト・三点バーストと切り替えができるようになっていた。この改造をしてくれたのはこの先生だ。

本来なら違法改造なのだがこの島に籍を置くのみに改造を認められている。（各銃メーカーの代表を脅して認めさせた。）

そのため自由に改造できる。この制度のためにアインシュタイン三世はこの島にいるのだ。

9

そうこうしているうちにHRホムルームが終わって最後の連絡を伝えようとしている時に>ボタン！< ドアを勢いよく開ける音がして

「東出！至急作戦室だ！チムメン連れて来い！」

「了解！高橋・森山・茉都香・岡本・山田来てくれ。」

いつもの4人+岡本・山田という6人チームで動くことにした。

岡本は重歩兵でベネリのM4 3inchモデルをぶっ放しても反動なんてないののように連射する巨漢の持ち主だ。

山田は岡本とチームを組んでいるやつで、愛銃はVZ・58という精密型の銃だ。岡本の影から相手に正確な射撃をすることのできる凄腕の持ち主である。

「何があっただろう?」

とみんなで話しながら作戦室に向かう俺たちであった。

## 第二射（後書き）

どうもACEです。

2射を読んでいただきありがとうございます。

一生懸命頑張りますのでどうぞよろしくお願いします。

感想・誤字脱字・要望等よろしくおねがいます。

### 第三射

「現在訪問中のオーストラリア財務大臣が誘拐された。」

「……………!?」「……………」

「質問いいですか？」

森山が許可を求めた。

「なんだ？」

「なぜSATではなくここなんですか？」

「今回の財務大臣による訪問が非公式だからだ。」

「!?わかりました。」

財務大臣が非公式での訪問だったためニュース等になっていなかった。そのため俺が事件を予想出でなかつたというわけだ。

「現在犯人たちは広島県霜月しもつき高校に立て籠もり中だ。東出のチームで制圧してくれ。」

「……………了解!!」「……………」

「全員防弾チョッキ・メット等を夜襲用に変更して第二ヘリポート集合だ。」

「「「「了解」「」「」

ここで説明しておこう。

夜襲用とは迷彩服が黒で防弾チョッキも黒、メットも黒という夜に着ることが多い服装にNVG（ナイト ビジョン ゴーグルの略だ）を装備したものだ。マズルフラッシュ（発射時に発光した光のこと）による失明を防ぐためすべての銃にサイプレッサーを付ける。

そして岡本はM4ではなくこういう時のためのAK-74を持ってくるように指示した。

「俺は単独で、茉都香と高橋、岡本と山田のペアと森山の狙撃という小隊に分ける。ヘリに乗り込み装備の最終確認だ。終わり次第でるぞ！」

「「「「了解！」

「「「「」

### 第三射（後書き）

どうもACEです。

第三射を読んでくださった皆様ありがとうございました。

いつも文字数少なくてすいません。

でも学生ということので許してください。

ではSFSをよろしく願いますm（）（）m

## 第四射（前書き）

すいません

読む方に夢中でした。

いるかわかりませんが待っててくださった皆様有難うございます。

では第四射どうぞ！！

## 第四射

「到着まで5分です。」

「わかりました。」

護送担当のヘリの運転手が告げてきた。

「夜襲用パラシュートの確認しとけよ」

今は先生の前ではないので堅苦しい言葉遣いはしていない。

「着きましたが50m近く離れた場所ですので西の方角に飛んでください。森山さんは西南西の方角にあるビルからの狙撃が良いかと思われます。」

ヘリの運転手による説明どおりおりて無線機で突入のタイミングを図ることにしたその瞬間「タン！」高めの独特の音恐らくXD9らしき発砲音が聞こえてきた。

「森山！スコープで状況確認してくれ。」

「財務大臣が何かを言ったため威嚇されたようです。」

「ありがとう。30秒後突入だが今回は静かに制圧だ。全員サイプレッサーつけて待機しろ。」

-----

「GO！」

無線でそう告げるとそれぞれが門番を一撃で仕留めて「静かに」戦闘が始まった。

高橋Side

「GO！」

将の合図により俺が一撃で門番の息の根を止めた。

今までに任務で何人も殺してきたためその辺の感覚が鈍り殺してもあんまり気にならない。

そのまま静かにドアを開けて入って行った。

Side out

岡本Side

「GO！」

「いくもごっ!？」

突入の合図がでてテンションが上がり叫ぼうとしたところで山田に口を塞がれた。

「ナイス山田！」

とお礼を言いつつAKのハイパワーで門番を悶絶させたあと縛って

茂みの方に捨てておいた。

入ったらいきなり見回りがいてビックリしたが山田が正確に首の頸動脈を銃弾で断ち切り悲鳴をあげる暇もなく絶命した。

「岡本は今回はただの殲滅しないんだしっかりしてくれよ！」

「うう・・・わかった」

財務大臣の事を肝に命じていて行動すると思った。

S i d e o u t

## 第五射（前書き）

本日は話目です。

## 第五射

森山 Side

僕はアインシュタイン先生の魔改造でM・200にサイプレッサーをつけている。

3人が入って行ったところ以外に2箇所入口を確認し門番を狙撃し射殺した。

その後はしばらく財務大臣のいる部屋を観察することにした。

Side out

俺は曲がり角で先を確認するために鏡を使おうと思いポケットから出し壁から出して確認しようとして時「ダダ！」鏡を打ち落とされた。

「チッ！」

静かに舌打しながら少しじょそをつけてスライディングしながら相手の足に3発当ててこかした。

すると相手が上半身を少し起こして乱射してきた。

そのうちの数発が防弾チョッキやメットの当たった。

衝撃はあるが特注のレベル？の防弾チョッキであるため貫通どころか骨折などもなく直ぐに反撃し相手は被弾し意識を手放した。

俺はマガジンを変えつつ森山に連絡をとった。

「他の2組の状況はどうだ？」

「今は制圧し終わって残りの敵は部屋の4人だけです。今は将の所に向かっところだ」

「ありがとう。大臣の周りにホシはいるか？」

「一人が近くにいます」

「わかった。合図でそいつを頼む」

「了解」

途中で食堂があり覗いてみると中に人がいた。

（森山からは死角か？）

と思いつつも狙いを定めて撃とうとしたところで……

「何をコンコンしてんの？」

「!?!?」

気づかれていた。

実際にMP-5を黄土色の迷彩服野郎に向けて撃ちつつ部屋の中へ入った。

奴が厨房の方へ入って行ったため机を2、3コたてて簡易的な身を隠すものを作った。

向こうがすぐに乱射を始めたので、できるだけ体を丸めて小さくしてやり過ごした。

「ガチガチ」

マガジンを変えている音がする。

よく見えなかったがドラムマガジンの銃を持っているように見えた。

いましかないと思い飛び出して撃とうとしたらリロードを終えて初弾装填の音が響いた。

まずい！と思ったらMP-5がはじき飛ばされてバラバラになっていた。

銃をこちらに向けていたので腰のあたりで両側に手を開いた。

降参したと見せかけるためである。

ゆっくり歩み寄ってくる。

今だ！とおもい相手から見えない位置にある、ヒップホルスターからSIG P226を抜き右腕と両足に一発ずつ叩き込んだ。

とっさに反応されて数発はなったものの俺には当たらなかった。

.....

「じゃ30秒後にフラッシュたいて突入するぞ！」

全員が立て籠もっている最後の部屋にたどり着いた。

「了解！」「了解！」

「森山は大臣近くのを頼むぜ！」

「わかってるって！」

全員小声で確認しあったあと突入の時を待った。

「よし！GO！」

俺の合図で突入した。

森山が一人ライフルで倒して、俺が足に2発と横腹に1発で一人倒して、山田と茉都香が一人ずつ倒して財務大臣を救出した。

茉都香が財務大臣を連れて外へ行き犯人を回収しようとした時・・・

「道連れだああ！！！」

犯人グループの一人が手に爆弾のスイッチらしきものを押そうとした。

「調子に乗るな！」

高橋が手首のあたりに銃をうちにそこから先を吹き飛ばした。

「後はうちの別働隊に任せるとするか」

SFSでは急ぎの任務が飛び込んでくることが多数あるため先行隊が強襲し、別働隊が回収するというパターンになることが多い。

そして今回の場合は、包囲もSFSのメンバーに入れ替わっていて報道陣にも一般人が誘拐・拉致されたとしか伝えられていない。

「んじゃ帰りますか。」

こうしているうちに全員が犯人グループを一箇所にまとめて応急処置や拘束を終えたので集合地点へ向かうことにした。

## 第五射（後書き）

土曜日ということで2話あげさせてもらいました。

これからもよろしくお願いします

## 第六射（前書き）

相変わらず駄文ですがよろしくお願いします。

## 第六射

「よくやったぞー！お前らガツハハハ」

学校に帰ると尾松が褒めながら高笑いしていた。

「ありがとうございます」

素直にお礼をいっていると、向こうからハゲ頭の鶴羽花校長つばはなが走ってきた。

「君たちオーストラリアの総督さんが表彰したらしいからオーストラリアにきて欲しいそうだ」

「わかりました」

.....

「えーせっかくオーストラリア行くのに2泊かよー！10泊ぐらいしてこうぜ。どうせ学校が金出してくれるんだしよ」

「そうだそうだ」

高橋がグダグダいって岡本も高橋の意見に賛成している。

「そういう考えは良くないよ！」

2人は茉都香に注意されて静かになった。

「それに今回はお松もついてくるんだぜ？」

俺がそういうと高橋と岡本が座り込んで「もう嫌だ」とか「よりによって尾松かよ！」とかぐちっている。

「おーい！悪い待たせたな」

「くくくくく荷物多い！！」「くくくく」

全員揃って驚いた。

何しろ尾松は大型トラック使わないと運べないような荷物をリヤカーで運んでいたのだ。

「先生8割おいて行きましようね」

「???まあいいが何故だ??」

そんなに飛行機に乗り切らんわ！と心の中で突っ込む俺と高橋・岡本であった。

「それじゃあ乗り込もうか」

尾松が促してみんなが金属探知機を通ろうとして最初に尾松が通ろうとして……

「ピーーーーー」

……金属探知機に反応した。

さすが教員！帯銃許可証を見せて別室に行き特有の決まりを説明されることになった。

別室に移動すると防衛省のお偉いさんらしきひとが立っていた。

「どうぞ」と言われて椅子に腰掛けると、防衛省の人は淡々と説明を始めた。

「一応銃は許可しますが、アサルトライフルやマシンピストルなどの連射武器やショットガンのような拡散するようなものライフルのように目立つものはやめてください」

あるいみほとんど禁止されたぞ！とかおもっている

「つまりハンドガンのみってことだな？」

高橋が俺の質問を代弁してくれた。

「まあ実質そういうことになりますね」

皆が「決まりならしょうがない」という気持ちでメインの武器を出していったのだが一人が出している武器で驚いた。

今回、尾松は黒のロングコートできたのだがその内側には10丁を超えるマシンガンやアサルトライフル、ショットガンが入っていたのだ。

そして空港の係員に頼んで鞆をとってきてもらい服の中にあつた銃とハンドガン系に入れ替え始めた。

コルトのM1911（ガバメント）やパイソン、デザートイーグルやM92Fミリタリー（ベレッタ）といった銃に入れ替えていき結局12丁を服の中に入れた。

当然皆は唾然としている。

もちろん数の多さにだがみんな口に出さずに静かに見守った。  
みんな無事搭乗することができた。

## 第七射（前書き）

遅くなってすいません。

しかも短いです。

最近父が家にいて執筆出来ませんでした。（言い訳です）  
では第七射どうぞ

## 第七射

オーストラリアまでというのは案外遠いもので8時間かかる。なのにするにはトランプぐらいでとても暇だ。

今は大富豪をしていた。大富豪といっても高橋以外大富豪に1度もなれていない。

高橋はトランプゲームでは最強なのだ。

しかしその大富豪も飽きてしまいやめてしまった。

各自携帯ゲーム機は持ってきてはいるがすでに充電がきれている。

唯一森山だけは電池で充電できる充電器を持ってきていてまだi padをいじっている。

横目で内容をみるとペガサスというテロ組織の交信用の掲示板だった。

ペガサスは世界有数のテロ組織でNo.3と言われている過激派集団だ。

宗教の枠を超えてめちゃくちゃしたいやつが集められている。

しかしその掲示板は世界中の警察などが精鋭を投入してもまだ開けていない所じゃないのか？とおもったが黙っておいた。ペガサスは活動が最近活発になってきているらしい。

そんなことを考えていると森山が紙に何かを書き出した。

「これを尾松先生まで。」

とって俺に渡してきた。  
回せということらしい。

森山のいうとおり尾松まで回ってお松が読み終わった。

「なんだって!!」

ダダダダダ

尾松が大声で叫んだのとのほぼ同時にマシンピストルを連射する音が聞こえた。

「「「「「「!?!?!?」「」「」「」

森山と尾松以外は尾松の声と銃声に驚いた。

## 第八射（前書き）

今日から冬休み！

でも更新ペースあがりませんか？

受験勉強がありますからね！

では第八射どうぞ

## 第八射

「「「「「!?!?」「」「」「」

銃声と尾松の声に驚いていると……

「動くんじゃない！俺らはペガサスだ！」

「丁寧に自分からバラしてくれました。

「おとなしくしてりゃあ悪いようにはしねえ！」

どっちにしろテロなんてしてるんだからビルに突っ込ませたりするんじゃないの？と思ったがこれも口には出さない。

「アニキ！目標のタワーがみえてきましたぜ」

「バカ！タワーに突っ込ませることがわかったらどうするんだ！」

「すみませんアニキ！タワーに突っ込ませるのを匂わせることは二度と言いません！」

「「「「「「……」「」「」「」「」

SFSのメンバーは自分から暴露してしまったことに対して沈黙してしまった。

「「「「「ぢやあああ」「」「」

飛行機の乗客が騒ぎ始めた。

ダウン！ダウン！

「静かにしろ！この飛行機に乗ったお前らが悪いんだ！」

銃声を聞き乗客はおとなしくなった。

SFSのメンバーは作戦を立てようとしたが尾松が制して

「俺一人で十分だ」

といいのこして敵の数を確認しだした。

尾松 side

敵の数は六人か・・・

ちいと厳しいか？？

まあなんとかなるだろう！

・・・やっぱり将に何人かやってもらった方がいいな。

でも教員として「お前らより上！」って事を見せておきたいから一人で行くか！

俺は脳内会議を終え、黒の防弾性のロングコートの中からLUGERを2丁取り出した。

そして立つと同時に「伏せろお！」とさげび乗客の方を向いていた

3人を速攻でしとめた。

そこでやっと2人が反応してきたが1人2発ずつ腹と心臓とあたりにぶち込んで息の根を止めた。

最後の一人の方に銃を向けて撃とうとしたら犯人が倒れた・・・

俺は何があったかわからず呆然としていると

「一人でかつこいいところ持つてくんじゃねえよ！」

高橋がそう言つてハツシユパピーを構えていた。

高橋 side

「俺一人で十分だ」だと!?

手柄独り占めしようとしてんじゃねえよ!

と思い銃を構えようとするが狙おうとするやつに限って尾松が倒れてしまう。

もう1人しか残ってないじゃねえか!

と思い構えるとまだ倒されてないようでも引き金を引いた。

銃弾は犯人の首に吸い込まれていき犯人は倒れた。

ふと尾松の方をみると呆然としていたので

「一人でかつこいいところ持ってくんじゃねえよ！」  
と試みてみた。

s i d e o u t

尾松が奮闘していたのに高橋がラストの一番かつこいいところをも  
つていつてしまった。

## 第九射（前書き）

短いです。

よく聞く話でできかけの小説が消えたって話を聞きます。  
体験してしまいました。

予想以上にダメージでかかったです。

すみません。言い訳でした。

## 第九射

結局飛行機を突っ込ませるタワーとはスカイツリーのことだったらしく、まだ日本の近海を飛んでいた。

燃料の補給と乗客へのお詫びの品を渡したのちに再度オーストラリアへ旅立った。  
そしてまた8時間飛行機に閉じ込められることとなった。

- - - - -

「尾松先生は寝ないんですか？」

「報告文書だけ仕上げたら休むさ」

「そうですか・・・では先に休みますね」

「おう」

「zzzz」

尾松 side

「zzzz」

やっと寝たな。

カバンから無線機（航空機内でも使用可）を取り出し通信を開始した。

「緋村さん東出だけじゃなくてチームをまるごとマークした方がいいんじゃないですかねえ？」

「君が進言するならそうしようじゃないの」

「ありがとうございます。ではまた日本で」

## 第九射（後書き）

フラグのこしていききました。

作者バカなんで思いつきで残しただけなんでどうなるかわかりませ  
ん。

## 第十射（前書き）

書き終わってコピーしようと思ったたらカットしてしまいオール消去・

・

気がなくなり一日空いてしまいました。

すでに何度も空いているんですけどww

第十射どうぞ！

## 第十射

「ついたぞおー！」

高橋が空港を出てはしゃいでいる。

こいつははしゃいだりすることが多く「子供か!？」と思う行動が多々ある。

今回も飛行機を降りたあたりからずっとテンションが高かったのだが、空港をでて抑えきれなくなったらしい。

「うるさい！ 馬鹿者が！」

と怒鳴って高橋を黙らせた。

高橋が「ううう」と悔しそうなっているがスルーしておこう。

それよりさつき尾松が怒鳴った方がうるさかったぞ。

「フンッ」「ゴチン」

なぜか殴られた。

「何で殴るんですか!？」

「殴らなきゃいけない気がしたからだ！」

尾松は心が読めるのか！すでに人外だな・・・

「フンッ」「ゴチン」

くそお・・・かなりいてえ。

その場でコントをしていると黒光りする高級車が俺たちの前に止まった。

そしてドアがあき、黒のスーツにズボンのポケットからイヤホンマイクのコードをのぞかせているマツチヨなおじさ「ムッ!？」「ゲホゲホ」お兄さんが降りてきた。

ってか心を読める人ってこんなにいるのか!?

「ムッ」「ムッ」

本当で怖いです。

ともいつつも尾松といれ以外すでに乗り込んでいるため俺もいそいで乗り込んだ。

.....

車に乗り込んだあとしばらく世間話や高橋のトランプの強さについて話していたが暇になってきてしまい、みんながバラバラのことをし出した。

今車にはコンセントがついていて充電することができたので大体はゲームをしていたが、将は座って、茉都香は将の膝の上で眠りについていた。

最初は気になったが眠気が勝り寝ていった。

高橋が将に殴りかかろうとしていたのは別の話。

## 第十一射（前書き）

どうもACEです。

何度も修正してすいませんm（　）（　）m

これからも誤字脱字・不自然な点・間違っているところを  
していただけるとありがたいです。

では第十一射どうぞ

## 第十一射

「パシイン」

乾いた音が響いた。

何の音かって？

俺が高橋にビンタされた音だよ！

いい感じに決まり頬がジンジンする・・・

状況を説明すると、総督さんの家についたから起こさなければならぬが、高橋が日頃の感謝を込めてんたしてきてやるうというわけだ。

いつもなら喧嘩しているところだが、総督さんの家についたらしいのでやめておいた。

中にはいると、良くアニメなどで見る右側と左側に階段がありに書き部分の真ん中あたりでつながっている大きなエントランス？があった。

そこからさらに一階部分に三カ所、二階部分に三カ所、それぞれ正面と左右に扉があり正面は扉を開けると廊下があるつくりになっているようだった。

あまりのスケールにみんなが呆然としてしていると案内人らしき人が一



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3768z/>

---

Special Force School (特殊部隊学校)

2011年12月28日08時48分発行